Relay Essay ポコポコ poco-poco ⑬

“ひゃくしょう”がつなぐ夢

橋本順子／はしもと・まさこ
JCNC北海道

最近APLAで話題となるのが〝ひゃくしょう〟、そして〝農〟について。ネグロスでは、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF−RC）が取組みの焦点だし、他の地域も、活動の原点にあるのが農業だから話題になるのは当然だが、〝ひゃくしょう〟については、これを口にする人の特別な思いを感じる。去る5月の総会で共同代表の疋田さんは語った。みんなが〝ひゃくしょう〟であれということは、誰もが田舎に住んで毎日畠に出る生活をするということではなく、都会に住んでいても〝農〟とつながる生き方があるはずだと。「ああ、産直のことね」と思われるだろう。確かにそうかもしれないが、単純にそうでもない、と感じている。そして、ここにいたって、私がこれまで札幌近郊で有機農業を営む農場にボランティアとしてかかわってきたこととAPLAが、太いパイプでつながるのを実感するのである。

「メノビレッジ長沼」が、1995年に発足した当初から取り組んできたのがCSA（Community Supported Agriculture＝地域が支える農業）だ。「非農家の会員が共同で百姓つきの自家菜園をもつようなもの」。会費を前払いして会の運営を支え、消費者、生産者が共に畠の恵みとリスクを分かち合う。私も発足時からの会員で、退職後は、ここで畠の草取りや野菜の配達の手伝いをしている。

ネグロスでは今、元砂糖キビ農園労働者たちが自立した百姓として、米・野菜づくりを始めている。KF−RCがその努力を支えている。そして思う。近隣の地域で野菜が売られたり、決まった消費者が野菜を買いに来たりするそうだが、そんな農業を育てたいと願う受け身でない消費者がもっと増えればいいな、と。そしてめざすは、食のみならず、ケアやエネルギーも自給できる地域の自立だ。なんだ、ここ北海道でやっていることも、ネグロスの農民たちが進もうとしている道もおなじではないか！

〝ひゃくしょう〟な私と〝ひゃくしょう〟なネグロスの若い研修生が、長沼の畠で共に働く情景を夢に描いている。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちらこちらに“ポコ”（水たまり）が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 13　2011.08.01

02　Relay Essay ポコポコ⑬　“ひゃくしょう”がつなぐ夢◎橋本順子
03　［特集］女たちの3月11日 ―生き抜くためのたたかい
　滝桜のように強く生きる ―47キロ内で種をまく農婦◎西沢江美子、会沢テル
　自分の居場所に居座って分かち合うしかない◎川崎 恵
　私たちのように再び立ち上がって ―スマトラ沖地震・津波被災者から◎佐伯奈津子
08　［Topics］
　フィリピンの農地改革を振り返る◎堀 芳枝
10　［Column］
　水俣と日本の今①　水俣よりごあいさつ◎原田利恵
　マイストーリー in ジャパン①　【ビルマ】ニーゾウさん
　仙人の雑読・濫読①　原発事故で思い浮かんだ短編◎秋山眞兄
　Have you ever seen the Cinema?⑦　『エアフォース・ワン』◎重政栄一郎
12　撮っておきアジア⑬　ベトナム、ホーチミン市◎原井一郎
13　APLA生活⑬　ゲランドの塩＆パレスチナのオリーブオイル
　―しらたかのバジルとブレンドされて◎疋田美津子
14　［Voice from APLA partners］
　【東ティモールより】東ティモールの仲間から東日本大震災の被災者に支援が届いています。
　【東ティモールより】地域自立に向けた取り組みが着実に進んでいます。
15　事務局便り

表紙のことば

ラオスのブランケット

このブランケット（寝具）は、ラオス北東部のフアパン県サムヌア地方に住むタイデン族の人によって30〜40年前に織られたものです。サムヌア地方の人びとは、織りの盛んなラオスの国の中でも最高峰の織手といわれています。

ざっくりとした風合いのある手紡ぎの木綿糸を用いた、厚手な感じで、お布団には気持ちよさそうです。女性たちはこの織物を織るために、綿を育て、収穫した綿を打ち、その綿から糸を紡ぎ、染め、畑仕事や子育てもしながら、多くの工程をこなして織り上げていきます。刺繍のように見える柄は浮き織りというラオス独特の技法を駆使して織られています。

黒く見える部分は藍で染められています。藍を建て11回以上染め重ね、さらにその上に赤い植物染料で染めたりして、さらに濃い色にするようです。藍は虫よけにもなり、皮膚にも良い効果があり、寝具を染めるには最適です。家族が健康に暮らせるように、という思いが込められているのを感じます。

（大薮明恵）

滝桜のように強く生きる
―47キロ内で種をまく農婦

西沢江美子／にしざわ・えみこ
農業ジャーナリスト
会沢テル／あいざわ・てる
三春町農民・元福島県農協女性部会長

東日本大震災の後、「私には何ができるのか」、「できることをしよう」というつかみどころのない言葉が目立っている。地震と津波という目に見える被害だけでなく、原発事故・放射能汚染という五感で受け止められない大きな不安や苦悩にさらされているからである。とりわけ福島県民にとっては、文字や言葉で表せない苦しみが日を追って深まっている。同時に、原発事故の実態が少しずつ明らかになるにつれて、見えない放射能が、怒りと不安と苛立ちを増幅させる。

3月11日。あの大震災で私は多くの知人、友人を亡くした。いまだに連絡のとれない友人も二人。

そんななか、出口の見えない原発事故の被害にさらされている友人・会沢テルさん（原発から47キロの三春町在住）に寄り添いながら、そこで農民として生きる彼女に少しでも近づき、原発に対して共に闘うことにした。農業女性と共に生きてきた私の最後の仕事になるであろう。彼女たちに続く農業女性が原発のない大地で、安全な農作物を作り、加工し、安心して喜んで食べてもらう日常を取り戻すための残りの人生であることを確信しながら、会沢テルさんとの「行ったり、来たり」が始まった。

「外に出るな」、「窓は開けるな」、「畑をうなうな」……あれもだめ、これもだめ、何もかも止まってしまい、生きることさえ苦しかった。ただじっと部屋の中に座っているしかなかったあの時からのはかりしれない葛藤。行く末の見えない原発事故の被害のもとで暮らす一人の農業女性の言葉や文字から、その一端を知ってほしい。「テルとエミコの往復書簡」とでも言いたいが、電話、手紙、FAX、宅配便、そして福島県三春町への新幹線と、この三カ月間あらゆる手

2011年4月23日。三春の滝桜。

特集
女たちの3月11日
―生き抜くためのたたかい―

地震、津波、原発事故と続く3.11大震災は、たくさんの人たちのいのちを、暮らしを奪い、運命を変えた。そして、そのしわよせは弱者へ向かった。お年寄り、こどもたち、そして女たち。

そのなかで、女たちは何を考え、どう行動したか。迫る放射能におびえながら自らの小さな生産・加工・販売を取り戻そうと動き出した福島・三春の農業女性、震災支援に走り回った山形・小国の人びと、そして2004年12月26日スマトラ沖地震・津波を生き抜いてきたインドネシア・北アチェ県タナ・パシール郡東クアラ・クルト村の女たち…。それぞれの3.11を追った。（編集部）

段で交流した。私と彼女のやりとりを、ここにご紹介する。

会沢テルさま……

仲間の企画 バス2台の「滝桜花見まつり」

3月15日。やっと会沢さんと連絡がとれた。「大丈夫」といういつもの優しい声にほっとしました。とにかく顔を見たいと思い、被災地へ行く友人の車に同乗しました。一年ぶりにお会いしたあなたは、何だかとても小さく、寂しそうでした。深く考え、先を見つめて歩いているあのあなたではない。一年前、三春町のシンボル「滝桜」の花見に誘ってくれ、春の冷たい雪に震える桜を見ながら、これからの農業女性の生き方、とりわけTPP（環太平洋パートナーシップ協定）を目前にしたとき、農協女性部のあり方を問わなければと語り合いましたね。きっと、農協女性部活動をしつづけてきたあなたは、雪に震えながらもどっしりと開花している老木の桜に、その活動を重ねたのでしょう。

あなたは「今年は放射能のせいで滝桜の花見もしてはだめなの。春なのに百姓が畑に出られないってある？」と怒っていました。気がついたら私は「花見やろうよ」と言っていましたね。背中を押したつもりだけど迷惑じゃなかったかしらとすごく悩んだの。でも、あの4月23日の「滝桜花見まつり」は、やってよかった。あなたにつながる地元の人、取り組んでくれた東京の人たち、そして九州や北海道はじめ各地からバス2台に乗ってきた応援の人たち。雨の中、「こんな時福島までなぜ行く」、「花見どころじゃないだろう」。そんな空気を突き破って滝桜へ。「今日の滝桜は何とも恐ろしい」、「おどろおどろしている」と我ことのように語る参加者の感想は、福島で生きる人びとの不安と怒りを共有し、農業や地域を元に戻す話し合いへと進められた。その会場には、三春町の町長さんもJAたむらの専務（現組合長）さんも参加。小さい町をあげて、原発を止め、日常活動を取り戻そうというエネルギーがひとつになった気がした。「福島は危ない」という空気が流れていたときに、自分の言葉で「もういやだ」「畑を耕そうよ」と発し、自分たちの空気をつくるきっかけになった気がしました。（江美子）

滝桜花見まつりの交流会の様子。

西沢江美子さま……

迷惑なんてとんでもない。あの「花見まつり」がなかったら、どんどん出口も目標もない暗い春から夏へとなっていたかも。私鬱かなと思うことが何回もありました。少しあの日のことを書きます。

その日はみそ作りが終わり、家路中でした。農協女性部に入って約30年。安全な食べものを作ることを第一目標としてきたので、食べることの基本である調味料こそ自分の手でと、みそ加工場の許可を取り、大豆も、糀も自分たちで作っています。自家用みそだけでなく、委託みそ、販売用、そして漬け床の三五八（さごはち）も作っています。これは冬の間の女たちの仕事で、収入にもなっています。その帰りでした。ゴーというすごい音、不気味な空の色、そして降ってきた雪。自動車を運転していた私は、ハンドルをとられ、よろよろと走った。瓦の落ちている家、割れた道路、倒れた石像……何が起きたかわからなかった。テレビの映像だけが家の中で動いていた。何も考えることがなかった。やがて被災者の対応に追われ、ストーブだ、毛布だ、日用品だと、役場からの連絡にただただ身体が走っていました。あの頃は三春町は安全だったのか、被災者の群れは三春へ三春へと。朝・昼・夜の三交代の炊き出しも。そのうちに被災者自らが自分たちでやってみますと言ってくれ、材料だけ届けた。不自由な老いた母を抱えた人、老農婦など、自分と同じ世代が何もかも失って、親戚のところにも行けない

と三春の体育館で暮らしている。声に出さなかったが、原発のことは心で反対を言っていた。「それではだめだったんだよね」。そういう富岡町から避難してきた女性の言葉に、身体を動かすことで考えまいとしていた原発をやめろという声が腹の底からわき上がってきました。こうした人たちとひとつになって、原発を止めたいです。

「土にさわるな」

万一に備えて、私たちも避難の準備をしました。食料、衣類、寝具、日用品などを自動車に積み、ガソリンを満タンにしています。外出は控え、それでも出るときはマスクと帽子、長袖姿。そして、土に触るな、種はまくな……苦しかった。三月は種をまくとき。農民にとって土に触れない、種をまけない、雑草をとれないのは地獄です。

何よりもさびしかったのは、お盆用に作る花の種がまけないことでした。たとえ花を作ったとしても、人びとが外出できないのなら、花など買う人もいないでしょう。そんなときに、あなたと出会ったのです。「種まこうよ、土掘ろうよ。安心して食べられるものは、みんなで食べようよ。昨年つくったものは安心よ。どんどん食べて、原発を止めようよ」。どうしてそんなにあなたは自信があるのかわかりませんでした。だけど、バス2台で来てくださった人たちは、みんな優しくて、何も「福島産は……」なんて言わずに、買い、食べてくださいました。

希望は捨てない

静まり返った三春の春に2台のバスは大きな穴を開けてくれた。福島の野菜は売れない、「風評被害」の当事者になってみて、この言葉がどれだけ当事者を傷つけているか思い知らされています。心がずたずたになって血が吹いている。それでも今は、「農民なら種をまこうよ。放射能で食べられないものになったら一緒に泣き、怒ろうよ」というあなたの言葉に、少しずつ前が見えるようになってきました。

21歳で会沢家に嫁ぎ、今年で50年。原発事故という表現できない不安に苦しめられているが、今年の「滝桜花見まつり」以来、恵泉女学園大学に講演に行くこともでき、次代の女性たちと語り、また、九州産直クラブの人たちは、三春町を中心に福島の食品を販売するために福岡県にお店をつくってくれ、全国ネットにものせて販売してくれるという。そして、この原発事故下で何としても生きていかなければならない女性の仲間たちに対して、大阪の連帯ユニオン関西生コン支部からの暖かい基金をいただき、勇気が出てきました。これまで私たち農業女性は卵一個を積み立てて家計をつくってきました。その延長線上に加工直売所があった。それを原発はつぶしてしまった。

今、多くの仲間たちのつながりで、私たち原発被害の地・福島三春町に太陽光で加工場をつくり、小さいけれど、小さいからこそ、確かな食べものをつくっていきたい。それが、原発をやめさせ、人としての幸せな生き方を取り戻すことだと思います。（テル）■

恵泉女学園大学の学生たちと話をする会沢さん。

自分の居場所に居座って 分かち合うしかない

川崎 恵／かわさき・めぐみ
山形県小国町、獣医・農業

3・11の後の2カ月間は走り回る日々でした。夫の吉己が車で被災地をかけめぐり、私は物資の調達や仲間作りなど後方支援を担いました。友人を尋ねて必死の思いで気仙沼や亘理（わたり）にも出かけました。

農繁期が始まる前でしたのでやれたのですね。

百姓ですからみそや米など色んなものがあるし、ネットワークもあり、それが力になりました。はじめはそれぞれが暗中模索で動いていたのですが、農業や林業、商業にかかわっている若い人たちと情報交換しているうちに、個々の取り組みがつながっていきました。

まずは仙台の病院からでした。夫の妹がそこで看護師として働き、彼女の夫も病院の調理士をしていてSOSが来たのです。それで米やみそ、水、燃料など思いつく限りの物資を車一杯に積んで出かけました。それから3月13日のことでした。それから2日後には、届けた物資がもうなくなったという連絡が入り、よく聞いてみると、医師やスタッフ50人が病院に缶詰になって医療活動をしているというのです。すぐに地元のスーパーで野菜などを箱買いしましたが、それでも足りず、新潟県まで調達に走りました。そのうち、近くの避難所からくる患者が何も食べていないということもわかってきて、「これは個人で対応できる問題ではない」と夫が農協婦人部に声をかけ、有志という形で支援の輪に入ってもらいました。それぞれ米を30キロずつ出し合い、その翌日の早朝には、急な申し出にもかかわらず集まった40人近くの協力のもと、3500個のおにぎりを2ヵ所の避難所へ届けました。

そんな活動を仲間がブログに書いたら、目に見える形の応援をしたいと日本各地、さらには外国から、次々と募金してくれる人が現れました。それで私たちが物資を買って、山形のNGO、後から加わったNPOと協力して、私の軽トラックは気仙沼でガレキ処理に走り回っていたので友人の車を借り、支援の行き届かないところへ。同時に、近隣の市町村にペットを連れて避難してきた人に調達した餌を届け、置き去りにされた犬猫、飢えている家畜たちに気持ちは焦るけれども手は尽くせず、そんなこんなで2ヵ所はバタバタと過ぎていきました。

そのあとは田植えやワラビ採りなど自分たちの仕事をしなければならなくなって、この1カ月間は黙々と仕事をしています。こんな綱渡りのような春の日常がなんといとおしいことでしょうか。

これからのこと

現地の状況は刻々と変わっています。何トンにも及ぶ水が九州から送られてきたその頃には水が出るようになったり、ランドセルを集めていたらカバン業者が新品をドンと寄付してくれ、メッセージ付きの膨大な数のランドセルが行き場を失い、我が家の小屋にうず高く積まれることになったり、避難所にも物が溢れてきたりしています。

3カ月以上が経過し、本当に必要な物は何なのか改めて考えています。支援の押しつけになっても駄目だし、本当に難しい。人間の根源的なものというか、生と死、幸と不幸、尊厳、生きる意味、神や仏……、仕事をしながら行きつ戻りつそんなことを考える日々です。

原発はまたそれとはまったく別なのですね。パンドラの箱が開いてしまった、ということなのでしょうか。心配した外国に住む親戚や友人たちが、こちらで引き受ける準備はあると言ってくれました。でも、自分だけ逃げたり遠くに行けば済むという問題ではないですよね。私たちは福島県の隣の県ですから、遠くの人よりは痛みが見える。だからこそ、その思いが強いのかもしれません。（聞き手・編集部・大野）■

私たちのように再び立ち上がって
―スマトラ沖地震・津波被災者から

佐伯奈津子／さえき・なつこ
インドネシア民主化支援ネットワーク（NINDJA）

苦難の避難生活

「もう耐えられない」

2004年12月26日スマトラ沖地震・津波から2カ月半後の3月半ば、北アチェ県タナ・パシール郡東クアラ・クルト村の女性たちは、泣きながら訴えた。

インドネシアからの独立を求める自由アチェ運動（GAM）への軍事作戦を展開してきた治安部隊にとって、避難所は住民を監視できる格好の場所である。タナ・パシール郡の避難所にも、郡役場、国軍、警察が管理する「救援」ポストが建設された。被災者を支援する以上に、避難所にGAMメンバーが潜伏すること、援助物資がGAMに流れることを警戒していた。

北アチェ県タナ・パシール郡東クアラ・クルト村の女性たち。

05年1月25日、男性6人がGAMに関与しているとして逮捕された。日没時の礼拝中に物資を取りに来させる、未明に避難所の掃除を命じる、スピーカーで「お前たちは豚のようだ」と言う――嫌がらせは日常茶飯事だった。

堪えきれなくなった一部の被災者たちは、3月12日、避難所を出て村に戻った。残った被災者たちも緊張し、男性たちが逮捕されないように女性たちが囲って夜を過ごしたという。

夫を失った女性たちは漁に

191世帯の家屋すべてが流失、70人が死亡した東クアラ・クルト村の人びとは、06年、仮設住宅暮らしを経て村に戻った。ドイツの団体が建設した家屋で、WFPの食糧援助（ひとりあたり月に米10kg、魚の缶詰2缶、食用油50g、インスタントラーメン5袋）を受けて、村での生活を再開した。狭すぎた台所は仮設住宅を解体した木材で改築した。塩水となった井戸の水は使えず、水道公社により5カ所に貯められた水を、手押しポンプで汲みに行く。夫を亡くした女性たちには重労働だ。その上、国際的な援助機関が一斉に実施した「フード・フォー・ワーク」は、被災者に現金収入をもたらした一方で、「ゴトン・ロヨン」と呼ばれる相互扶助システムを破壊した。夫と子ども2人を失ったある女性は、こうつぶやいた。「今は、ちょっとしたことを頼むのでも、なんでもおカネだから……」

インドネシア民主化支援ネットワーク（NINDJA）は津波直後、地元のNGO「Jari Aceh」と協力し、東クアラ・クルト村の被災者にエビを獲る漁具を支援した。村でコーディネートしてくれた被災者の「（漁は）男性の仕事だ」との言葉をそのまま受け取った。しかし06年2月、実は女性たちも漁に出ること、漁網を希望したが、村の男性に援助対象から外されていたことを知らされる。ただちにカドラという魚を獲る網を製作し、希望する女性40人に配布した。このときも男性からの介入があったが、女性たちが無視したら、黙って去っていったという。

立ち上がった女性たち

津波から6年半経った11年6月、Jari Acehのスタッフに、村を訪問してもらった。

女性たちは支援された漁網を繕い、今も漁に出ていた。獲ったカドラは家で食べたり、塩干魚にして売ったり、米と交換したりする。売れば、日に1万ルピア（約100円）ほどの収入だ。カドラの季節である12月なら、2万～5万ルピア稼げる。

女性たちが漁に出ることに対し、男性たちの目は依然として冷たい。「パワン（漁船主）が漁に出るぞ」とからかわれた女性もいる。村に牛、ヤギ、漁船といった援助が来ても、すでにカドラ漁網を得たという理由で、援助を受け取れなかったという。

女性たちは2年前から、田んぼ仕事も始めた。2×3mのゴザを編み、1枚3万5000ルピアで売る。収入を得るために、女性たちはあらゆる努力を惜しまない。

東日本大震災の報に、女性たちは自身が体験したことを思い出している。「何もかも失っても、私たちのように再び立ち上がってほしい。物質的な援助はできないけれど、被災者が強くいられるよう、耐えられるよう、祈っている」。紛争と津波を乗り越えた女性たちの願いだ。■

フィリピンの農地改革を振り返る

堀 芳枝／ほり・よしえ
恵泉女学園大学准教授

「土地を耕す者の手に」（Land to the tiller）という、当たり前のことがフィリピンではいまだに実現していない（とはいえ、日本も敗戦してGHQが外発的に農地改革を断行したから、農地改革ができたのだが）。この大土地所有制度は16世紀にフィリピンを植民地化したスペインがもたらし、地主（富裕層）―小作農・農業労働者（貧困者層）という生産関係を軸とする社会構造を生み出した。これが今日も続くフィリピンの貧困と政治不安の根本的な原因である。19世紀末にフィリピンを植民地化したアメリカは、この制度を温存しながら、民主主義制度を導入した。国家の枠組みから排除された小作農や農業労働者たちは、反帝国主義・反地主、そして真の農地改革の実現をスローガンに掲げるフィリピン共産党（1930年設立）に共感し、自らの武力闘争に参加した。彼らにとってこれらのスローガンは政治・経済的自立、すなわち「自由」を意味したからだ。

戦後のフィリピンの農地改革は、冷戦・開発独裁・民主主義といった時代のイデオロギーや国内状況の影響を受けながら実施された。まず、1955年と1963年に制定された農地改革法は、いずれも冷戦の中で共産主義の拡大を防御するためのもので、地主の利益を損なわない程度の農地分配であったために、実際にはほとんど実施されなかった。次に、マルコス大統領による「大統領令布告27号〈小作解放令・1972年〉」は、農村の飢餓を回避するために、米とトウモロコシの農地を対象地とした点で一歩前進といえた。しかし、マルコスの本当の狙いは、国民の支持を得て大統領として三選（法律では禁止）されることと、競合する地主の弱体化にあった。さらに、マルコスを追放して民主主義を復活させたコラソン・アキノ大統領の下で制定された包括的農地改革法（1988年）は、すべての農民への農地解放をうたったものの、地主であるアキノ大統領が真っ先に自分の農地を農地改革の対象から外し、農民の期待を大きく裏切った。

農地改革の実績と課題

とはいえ、農民たちは泣き寝入りするわけにはいかない。1990年代になると冷戦の終結などにともなう共産党の分裂によって、逆に様々な立場のNGOや農民組織が、農地改革省内の良心的な官僚と協力関係をつくって「ピ（ま）ビンカ・ストラテジー」を展開し、土地所有裁定証書（Certificate Land Ownership Award、以下CLOAと略）を取得していった。2007年12月までの農地改革の実績は**表1**の通りである。これをみると、米やトウモロコシの農地、政府管理の土地などは順調に分配されているが、地主の私有地の強制収用は目標の18％しか達成できていない。地主たちは官僚への賄賂、裁判、農民への執拗な嫌がらせと暴力を使って、農地分配に抵抗しつづけているからだ。

では、オルター・トレード・ジャパン（ATJ）やAPLAがかかわっているネグロス島の農地改革を見てみよう（**表2**参照）。表1と同様に、地主の私有地の農地改革は約5年前の達成率が16％だったので、5年間で5％しか分配が進展していないことが一目瞭然である。

また、ネグロス島の農地改革に関する政府の報告書によると、ネグロス島では1989年～2007年にかけて11万1830haの農地が7万8470人に分配された。受益者の多くは元砂糖キビ労働者で、一人当たりの農地は約1・38haである。受益者の76％は男性、24％が女性である。この数字は、女性の不動産資産の保有率が男性よりも低いことを示し、女性が寡婦となったり、離婚すると、経済的により困窮する可能性が高いことを物語っている。ジェンダーの観点からすれば、女性の農地の所有権の問題は改善されるべき課題となる。そして、男性の平均年齢は51歳であることから、ネグロスでも10年後には後継者の問題が起きる可能性がある。また、CLOAを個人名義で所有しているのは全体の39％に過ぎず、組合などの名義で登録されているCLOAは61％を占めている。

さらに注目すべきは、ネグロス島のCLOA受益者の年間の平均収入1万8285ペソという数字は、砂糖キビ労働者の年間の平均収入5万2000ペソ（1日の最低賃金203ペソで働いた場合）より低いことである。資本力の小さい受益者にとって、ネグロス島で長年続けられてきた資本集約的な砂糖を生産しつづけることは難しいのであろう。だからといって、砂糖しか生産したことのない受益者たちは、外部からのアイデアや資金・技術支援がなければ、他の作物に転換することはリスクが高いと考えて、足踏みしてしまうと推測される。そして、砂糖の生産を継続できずに、農地を放棄し、借金の抵当に差し押さえられている者もいるという。特にバコロド市周辺では地価が上昇していることから、農地を住宅地や商業用地へ転用するケースが目立っているそうだ。これでは農民たちが、何のために苦労して農地を手にしたのかわからなくなってしまう。ネグロス州の農地改革省がまとめた報告書も、砂糖キビ労働者が農民として自立してゆくためには農地を分配するだけでなく、技術や資金の支援、流通や販売のサポートといった総合的な支援の必要性を指摘している。こうした問題は、他の地域でも多かれ少なかれみられる傾向であると考えられる。

農地改革・さらに5年延長

ところで、当初1998年までの10年間で完了する予定であった農地改革は、先に述べたような地主の頑迷な抵抗に行政の非効率性も加わって、2008年まで延長されることになった。そして、農地改革が終了する2008年頃から、再びNGOや農民組織が農地改革の継続を訴えて、党派やイデオロギーを超えた大規模なキャンペーンを実施した。ミンダナオ島からルソン島マニラまで農地改革の継続を訴えるデモ行進の中で、農民運動のリーダー的存在であったスミラオの農民が暗殺される事件も起きた。しかし、その後もキャンペーンを続けて議会に圧力をかけたこともあって、2014年6月30日まで農地改革を延長することを盛り込んだ農地改革修正法（RA・9700）が制定された。

農地改革修正法の目的は、フィリピンが工業化を進め、国際競争力に打ち勝つ企業を育成してゆくために、農地転用などの必要があることを認めつつ、これまでの包括的農地改革法（RA・6657）をより一層実施して、農民の権利や食料安全保障を高めることにあるとした（第1条）。農地改革は2014年6月30日をもって終了することが明記され、実施のための予算は1500億ペソとした。これまでの農地改革の問題点を改めるために、農地転用禁止の条例も追加され、CLOAを取得した農地は10年間、売却及び商業・工業・住宅地に転用することが禁止され（第12条）、灌漑が整備された農地・灌漑可能な農地の転用も禁止している（第22条）。ジェンダーについては、農地の分配においては男女平等となり、女性が農地取得後のサポートサービスを受ける権利を認め、コミュニティの活動に女性も積極的に参加することを奨励し、男女等しく所得向上の機会を享受できるようにした。さらに、農地改革省は、女性の権利を保護・促進してゆくための女性のための相談デスクを設置することにした（第15条）。前述で指摘したように、農地取得後のフォローアップも重要な課題である。政府の手続きを簡素化し、コミュニティ単位で融資を受けられるようにしたり、農業発展のためのプロジェクトを実施するよう明記した。

政府は残りの私有地約122haを、あと5年で解放する一方で、農地を取得した後の農民たちの収入を安定させることを同時並行していかねばならないが、これまでの経緯を考えれば、政府にそれほど期待はできない。とすれば、オルター・トレード社（ATC）のように独自に流通・販売のルートを確保したり、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF―RC）のように野菜の栽培や養豚の技術を10～20代の若者に教え、市場を一緒に開拓するようなプロジェクトを、他のNGOや農民組織も立ち上げることが重要なのかもしれない。課題が山積するフィリピンの農地改革を今後も見守り続けたい。■

〈注〉ビビンカとは蒸したもち米をココナッミルクと混ぜて両面を焼いたフィリピンの伝統菓子である。農地改革省の両親派とNGO、住民組織が農地改革をめぐって様々な過程で相互に影響しあい、変容しながら政府（上から）とNGOと農民（下から）の両面から農地改革運動を実現してゆく国家と社会の動態をこのビビンカに準えられた。詳しくは、Borras,Saturnino M.,The BIBINGKA Strategy in Land Reform Implementation: Autonomous Peasant Movement and State Reformists in the Philippines, Institute for Popular Democracy,1999.

【表1】 農地種類別による農地改革実績（1987年7月～2007年12月）

		農地の種類	実施目標（ha）	実績（ha）	達成率（%）
農地改革省	私有地	コメ・トウモロコシ農地（大統領令第27号）	579,520	551,549	95%
		自発的売却申請（Voluntary-Offer-to-Sell）	396,684	584,303	147%
		自発的土地移転（Voluntary Land Transfer）	284,742	650,910	228%
		政府金融機関抵当差押地（GFI owned）	229,796	162,406	70%
		強制収用（Compulsory Acquisition）	**1,505,363**	**276,963**	**18%**
		小計	2,996,105	2,226,131	74%
	公有地	政府公有地（Government Owned Land）	657,843	908,684	138%
		譲渡・耕作可能公有地	70,173	69,770	99%
		入植農地（Settlements）	566,332	685,491	121%
		小計	1,294,348	1,663,945	128%
	中計		4,290,453	3,890,076	90%
天然環境資源省	遊休地・放棄地（Public Abandoned & Disposable Land）		2,502,000	1,846,705	73%
	総合社会林業プログラム（Integrated Social Forestry Program）		1,269,411	1,042,634	82%
	小計		3,771,411	2,889,339	76%
計			8,064,864	5,778,678	71%

〔出所〕Presidential Agrarian Reform Council Secretariat, Comprehensive Agrarian Reform Program at 20: A Performance Report, DAR, 2009,p.13　ただし、実績目標については記載がなかったため、堀芳枝『内発的民主主義への一考察――フィリピンの農地改革における政府、NGO、住民組織』国際書院、2005年、87ページ参照。

【表2】 西ネグロス州 農地種類別による農地改革実績（2007年10月31日まで）

		農地の種類	実施目標（ha）	実績（ha）	達成率（%）
農地改革省	私有地	コメ・トウモロコシ農地（大統領令第27号）	16,148	10,728	66%
		自発的売却申請（Voluntary-Offer-to-Sell）	89,428	75,023	84%
		自発的土地移転（Voluntary Land Transfer）	5,773	5,459	95%
		政府金融機関抵当差押地（GFI owned）	16,271	14,355	88%
		強制収用（Compulsory Acquisition）	**79,999**	**16,949**	**21%**
		小計	207,618	122,514	59%
	公有地	政府公有地（Government Owned Land）	24,680	24,680	100%
		譲渡・耕作可能公有地	0	0	0%
		入植農地（Settlements）	14,166	14,166	100%
		小計	38,846	38,846	100%
計			246,464	161,360	65 %

〔資料提供〕オルター・トレード社

01

水俣と日本の今 その1

原田利恵／はらだ・りえ
環境省国立水俣病総合研究センター研究員

水俣よりごあいさつ

縁あって、今回から本コラムを担当することになりました。この4月から水俣病の調査研究のためにつくられた国の機関で働いています。余所者・新参者の視点で水俣をお伝えしていきたいと思います。

3・11には東京であの大地震を経験し、放射能汚染の不安に慄きました。「非常事態」のなか九州の西の端へ行ってしまうことへの躊躇いがありましたが、ある人からの「水俣もかつての被災地であったのだから、そこで頑張りなさい」との言葉を胸に赴任しました。震災について、「九州では他人事だよ」と聞いていたのに、実際に来てみて、水俣市民の関心の高さに驚きました。震災関連の講演会などには沢山人が集まりますし、いろんな形の支援が行われています。水俣病の患者さんたちも我が事のように心を痛め、石牟礼道子さんの言葉でいえば「悶え神さん」になっておられます。

百聞排水口に安置されたお地蔵様は、新潟水俣病患者から贈られたもの。(2011年5月1日筆者撮影)

水俣には、水俣病による過酷な体験を経て思想的に非常に鍛えられた人たちがいます。また、全国各地から支援、取材、研究目的などで色んな人が集まっています。かつては「市民の敵」として排除された患者さんや、地元を「かき回す」と煙たがられた支援者の中には、今や地域社会のキーパーソンとして、一次産業や社会福祉分野、まちづくり、観光業などで活躍している人たちがいます。また、1960年代後半あたりから水俣病問題に関わってきた人たちの子弟である「第二世代」が、地域再生という文脈でネットワークを築きつつあることが注目されます。水俣は、海と山の豊かな自然に恵まれていますが、人材の宝庫でもあるようです。そこが水俣の魅力となっています。このコーナーでは、美しい景観、美味しい食べ物、魅力的な海の民、山の民、まちの人たちについて、『ハリーナ』読者の自然や自然に寄り添う人たちへのまなざしを意識しながら、紹介していく予定です。

〈注〉心身が不自由な人で直接は何もできないけれど、相手の苦しみや悲しみを一身に受けとめて、悶え苦しむ感受性の強い人たちのこと。

03

仙人の雑読・濫読 01

秋山眞兄／あきやま・なおえ
APLA共同代表

原発事故で思い浮かんだ短編

《ある村に穴が出現した。若者が穴に向かって「おーい、でてこーい」と叫んだが反響がない。小さな石を投げ込んでも反響がない。いろいろ試した結果、とてつもなく深い穴ということになり、原子炉のカスを捨てるのに好都合と利権家が手に入れ、原子力発電会社が争って契約。村人は心配したが、数千年は絶対に地上に害が出ない、利益の配分をわたす、ということで納得。そして、原子炉のカスはもとより、伝染病実験に使われた動物死体など、困ったものは何でも捨てていった。そしてある日。工事中の高層ビルの上にいた作業員の頭の上で「おーい、でてこーい」と叫ぶ声が聞こえ、その方角から小さな石が落ちていったが、その石には作業員は気がつかなかった。》

60年代前半の高校生時代、SFやファンタジーの短編を読みまくり、挙句の果て友人たちと同人誌を発行する始末。友人は〈占い師が客の手を見て言った。「貴方はだまされやすい人ですね」〉などという短編にもならないもの書いて悦にいっていた。

『ボッコちゃん』星 新一
新潮社

福島第一原発事故の報道を聞いたとき、その当時読んだこの短編（文庫本でたった6頁）が思い浮かんだ。作者はかの星新一（新潮文庫『ボッコちゃん』収載）。さらに計画停電・節電と騒ぎ出したとき、やはりその当時に読んだ海外の短編（文庫本で43頁）も思い出した。

《ある日、ラジオの音声が途切れ途切れになり、間もなくラジオやテレビが全く機能しなくなる。やがて電灯も消え、車が動かなくなり、原爆実験は不発になり、原子炉も機能停止になる。目に見えず、直接危害を加えることはないが、ただ電気を食べてしまうという侵略者に地球が征服されてしまったのである。蒸気機関車や馬車、ローソクや石油ランプで生活するようになり、人々は楽器を奏で、ゆったり平和に暮らすようになった。ただ、雷鳴だけで稲妻がない雷に寂しさを覚えるのであった。》（フレドリック・ブラウン「ヴァヴェリ地球を征服す」創元SF文庫『天使と宇宙船』収載）

50年前の慧眼に脱帽である。

04

Have you ever seen the *Cinema*? あの映画を見たかい？ 07

『エアフォース・ワン』（1997年、米国）

【監督】ウォルフガング・ペーターゼン 【出演】ハリソン・フォード、ゲイリー・オールドマン

重政栄一郎／しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー

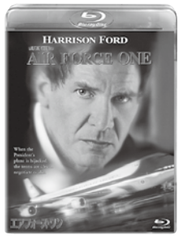
「正義」をめぐる仁義なき戦い…

主役はアメリカ合衆国大統領マーシャル。ベトナム戦争の英雄の彼が、エアフォース・ワン（大統領専用機）をハイジャックした凶悪なテロリストたちに単身、戦いを挑む！ 「平和」と「正義」、そして家族と仲間を守るために……というアクション映画。

ロシア軍を配下に従えた米軍の特殊部隊が夜陰に紛れ、カザフスタン大統領宮殿を襲撃（＝奇襲攻撃）、大統領ラデクを逮捕（＝拉致）、そして収監（＝監禁）するところから映画は始まる。

作戦「成功」後、モスクワで行われたマーシャルの演説で彼の信念が明かされる。「民主主義を抑圧し」、「核兵器を保有し」、「カザフスタンに恐怖政治を敷き」、「20万人の市民を殺した」ラデク将軍のような「悪」の独裁者は排除せねばならない。その上で「真の平和は戦争の回避ではなく、正義の確立である」、「人道上、正しい道を選択する」という……。

つまり、「真の平和」の実現のためには武力攻撃を躊躇することはない。我々は「正義」であり、その決断・実行は「正しい道」である、ということだ。


『エアフォース・ワン』
発売元：ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン
価　格：1,500円〔DVD〕（税込）
ブルーレイ低価格作品【2010年12月22日発売】

一方、テロリストの首謀者は言う。「石油の値段のために10万人のイラク人を殺して戦争のルールを講釈する気か」「ロシアは〝自由〟という疫病にかかり、今やギャングと売春の巣だ」「貴様らはすべて奪った」と……。

彼らはラデク将軍の釈放を要求し、祖国の再生を目指す。ここにはマーシャル（＝米国）とは別の、そして相反する「正義」が存在する。彼らもまた自らが信ずる「正義」を実現するために武器を手に取り、戦っている。

右であれ左であれ、疑うことなく自らの「正義」を謳う者は、相容れない「正義」の存在を認めない。それを主張する者はすなわち「悪」、やがて「敵」として対峙することになる。

マーシャルの思考は、米国の様々な現実の外交政策や軍事行動を想起させる。米国のむきだしの本音を如実に表している。この映画の製作は1997年。イラク戦争より前、ビン・ラディン容疑者殺害はずっと先だ。

力で以て成し遂げられた「正義」はそれを維持し、一層拡大するために、更なる強大な力を常に求め続ける。やがてそれは自らの心身を内側から蝕み始めるにもかかわらず……。

02

マイストーリー in ジャパン 日本に住む在日外国人たち ……【第一回】

【ビルマ】ニーゾウさん／*Nyi Zaw*

ニーゾウさんが日本に来たのは13年前。小さいときから、国の外に出たいと思っていた。ここにはほしいものがない、やりたいことがない、たくさん働いて親に恩返しをしたい。当時多くの子どもたちが同じことを思っていたという。ビデオや雑誌を通じて知るヨーロッパや米国にあこがれた。アジアは自国の軍事政権をサポートしている、そして自由がないと感じていた。1997年、縁あって西洋諸国ではなかったが、日本に来ることになった。

ビルマから日本への出稼ぎは、1980年代から始まり、90年代に増えた。しかし、難民申請がなかなか通らない状況が続いた。そんななか、07年のビルマでのお坊さんたちのデモ（ジャーナリストの長井健司が殺害され日本でも報道された）、そして08年のサイクロンの被害がきっかけで、日本でのビルマ人の難民申請が通りやすくなった。最近の若い出稼ぎの子たちは、苦労して働いてきた前の世代の人が帰国後、豊かな生活をしているのを見て日本へ来る。難民申請も、日本の生活も以前に比べるとそれほどの苦労がいらなくなったのはいいことだった一方で、日本では簡単に稼げると思い、自由を錯覚して羽目を外す人も多く、今そこにギャップを感じているという。

ニーゾウさん。新宿、初台にて。

家族とはタイで一回会ったきり。仮に帰国した場合、滞在月数×1万円を国に納めなくてはならず、また難民申請をしていると、理由がなくとも帰国した時に刑務所に入れられる可能性もある。かつては、実家に電話するときには村に数台しかない電話にオペレーターを通じてつなげたが、今は携帯があり親とも直接話せる。しかし、時代が変わり便利になっても、他の国の在日外国人のように自由に国には帰れない。「自分のことを話すときは、いつもビルマの話をしないといけないんだ」。そうしないと自分の事情を説明しきれない。この言葉に、ニーゾウさん含め、在日ビルマ人たちの複雑な気持ちが混じっているように思えた。

聞き手：吉澤真満子（編集部）

APLA生活 13

今回のお題

ゲランドの塩&パレスチナのオリーブオイル
しらたかのバジルとブレンドされて

レポーター
疋田美津子／ひきた・みつこ
しらたかノラの会

朝4時半。バジルの畑は薄く靄がかかっている。畑に入るとバジルの香りが身体を包む。1ヵ月あまり前に定植した苗は丈がもう50センチぐらいに伸びた。この畑のバジルは今日から5日おきごとに若芽を摘む作業がはじまる。300株あまりの苗の若芽を摘み終わるのに約2時間。持ってきたビニールの大袋ふたつがいっぱいになった。約6キロの収穫だ。

9時までに作業場に集められた今日のバジルは会員4人で17キロ。これを洗浄して水切りしたあと、オリーブオイルと塩を混ぜてフードプロセッサーで撹拌する。それを計量してパックしていくのだが、撹拌後、空気に触れている時間が長いと茶色に変色するので、一連の作業はてきぱきと迅速に回転させていく。バジルペーストづくりはここ数年、ノラの会の夏の定番仕事になっている。

バジルといえば、ペスト・ジェノヴェーゼだ。インド原産のバジルがイタリアに伝わり、特に北西部のジェノヴァの気候がバジルの栽培に適していたらしい。バジルにオリーブオイル、松の実、にんにく、パルメザンチーズを合わせてペースト状にしたのがペスト・ジェノヴェーゼ。パスタや茹でた野菜に和えるのにとても便利で、イタリア料理には欠かせない調味料となっている。

しらたかノラの会ではこのペスト・ジェノヴェーゼを、バジルにオリーブオイルと塩だけを合わせたプレーンタイプ「バジルペースト」として製品化した。オリーブオイルはパレスチナ産、塩はフランスのゲランドの塩（いずれもATJ）を選んだ。1000年にもわたって栽培され続けてきたパレスチナのオリーブと、古来からの伝統的製法で作られているゲランドの塩。それぞれの生産地に行って生産者に会う機会はまだ巡ってきていないが、このバジルペーストは彼らとの合作だ。いつかこれを持ってそれぞれの地を訪れてみたい。■

エビとオクラのバジリコ・スパゲッティ

①パスタを茹でる。
②この間に刻んだにんにくをオリーブオイルで軽く炒め、エビとオクラを加えてさらに炒める。
③これにパスタの茹で汁とバジルペースト適量を加え、混ぜ合わせたら火を止める。
④茹でたパスタを加え、さっと和えて、お皿に盛る。

バジリコ・ポテト

茹でたじゃがいもといんげんにバジルペースト適量を和えるだけ。

バジル・バター

クリームタイプのバターに極少量のバジルペーストを混ぜ合わせ、パンのスプレッドに。フランス・パンがお薦め。

「バジルペースト」はこちらでお買い求めください！

しらたかノラの会
ホームページ：http://shiratakanora.web.fc2.com/
〒992-0831 山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥甲7-1 めぐり屋内
TEL／FAX：0238-85-5675

撮っておきアジア
Totteoki ASIA

13

撮影者◎原井一郎／はらい・いちろう
撮影場所◎ベトナム、ホーチミン市

1 2
3
4 5

1 ── ホーチミンという呼称よりサイゴンという旧市名に市民も馴染んでいる。街は建築ラッシュでいたるところで高層化が進む。

2 ── 朝焼けに染まるサイゴン川。遠い街並みが蜃気楼のように浮上する。経済成長率7%、生産人口65%の若く伸び行くこの国を象徴するような光景。

3 ── バイクは市民の必需品。道路に溢れ、洪水のような車列と警笛音に圧倒される。

4 ── ベトナム戦争終結から35年。戦争を知らない国民が増えている。激戦地クチも今や観光名所。

5 ── 何か街頭イベントだろうか。アオザイ姿の娘たちは花のように美しい。

（2010年11月撮影）

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。
募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度（日本も含みます）詳しくはAPLA／あぷら事務局（TEL：03-5273-8160）までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております！

From East Timor【東ティモールより】

東ティモールの仲間から東日本大震災の被災者に支援が届いています。

3月11日の東日本大震災のニュースは東ティモールにも届き、大きな衝撃と悲しみを与えました。そんななか、オルター・トレード・ティモール社（ATT）と東ティモール大学のピース・センターが協力して、被災者支援のための募金キャンペーンを実施しました。4月12日にはアピールのための記者会見も開き、その様子は国営テレビ局のティモール・ロロサエ・テレビ（TVTL）で放送され、全国紙のティモール・ポストにも取り上げられました。そして、14日からは学生による募金活動がスタート。大学生約70人が授業の合間を縫って、手作りの募金箱を手に首都ディリにある民家、事務所、レストランを1軒ずつ訪ねては、被災した人びとのために募金を呼びかけました。その結果、1300米ドル以上の募金が集まりました。この募金はAPLA／ATJを通じて津波の被災地や原発事故の被害を受けた農民に届けられる予定です。（ATJコーヒー担当：名和尚毅）

募金活動中の学生たち。

From East Timor【東ティモールより】

地域自立に向けた取り組みが着実に進んでいます。

コーヒー収穫シーズンに突入したばかりのエルメラ県を駆け足で訪問してきました。フィリピンとの2度の交流を終えてから約3カ月。あの時の気づきや学びがどう形を変えているのかドキドキしながら、4月末～5月上旬にかけて、エルメラ県の2つのコミュニティを訪問しました。「それぞれができることから確実に始めている」様子がそこかしこに見られて感慨深い再訪となりました。

Fitun Caetano（フィトゥン・ケタノ）では、コーヒーの実のつき具合が非常に悪く、収入も落ち込むだろうという切羽詰まった状況も手伝っているとはいえ、収入の多角化や自給作物を増やすことに真剣に取り組んでいる様子が伝わってきました。グループで開墾したデモファームも、各メンバーの家の周辺の菜園も、以前訪問したときの様子からは想像もできないほどに、手入れの行き届いた素敵なものになっていました。また、フィリピンの仲間の助言を受けて、デモファームの中に立派なため池が2つ完成していました。コーヒー収穫シーズンを目前に、稚魚を購入するための十分なお金がないことが目下の悩みなので、APLAとしてどのように協力できるかを検討しているところです。貴重なたんぱく源として重宝される魚を上手く育てられるようになれば、コーヒーと並ぶ収入の柱になっていくはずです。

GATAMIR（ガタミル）では、リキサ県マウバラ郡の女性グループのリーダーであるミエルタさんから、食品加工の具体的なノウハウや、女性がグループとして活動していく際に大切なポイントなどを共有してもらうプログラムを実施しました。情報が限られている村の女性たちにとって、同じ東ティモールの女性が様々な工夫をして「成功」している話を聴くことは、非常に大きな刺激となったのは確実です。2泊3日という限られた国内交流でしたが、おしゃべりはつきることがなく、コーヒー収穫シーズンの終了後には、再度交流を実施してほしい！　と熱い要望が出ています。GATAMIRは、今後グループでの小規模養豚に取り組んでいくことになり、コーヒーの前払い金として、ATTからオスとメスの豚1頭ずつがグループに供与されることになっています。1月の交流の際に、フィリピンの仲間から学んだ飼育のポイントを元に自分たちで計画的に交配し、生計の柱にしていくことが目標です。（APLA事務局：野川未央）

デモファーム開墾前（上）、開墾後3ヵ月（下）。

【事務局だより】

事務局の動き（2011年5月～2011年7月）

5月 14日	『世界フェアトレード・デー2011』にATJと一緒に参加しました。
5月 15日	築地本願寺で開催される『安穏朝市』にパルシステム・セカンドリーグ支援室と参加しました。
5月 21日	第四回APLA総会開催。
5月 23日、24日	山梨県・白州郷牧場に大橋と吉澤が訪問しました。
5月 28日	WE21さがみはらにて、フェアトレードについて、野川が講演を行いました。
6月 3日	和光大学で、野川が授業を行いました。
6月 8日	恵泉女学園大学で、大橋が授業を行いました。
6月 8日～16日	フィリピン・北部ルソンへ秋山と吉澤が出張しました。
6月 13日～18日	BMW技術協会・匠集団そらが、フィリピンのBMWプラントチェックのため北部ルソンとネグロスを訪問しました。
6月 14日	大正大学で、野川が授業を行いました。
6月 16日	アーユス仏教国際協力ネットワークの総会で、野川がAPLAの活動について講演しました。
6月 17日	成蹊大学で、野川が授業を行いました。
6月 19日	築地本願寺で開催される『安穏朝市』にパルシステム・セカンドリーグ支援室と参加しました。
6月 24日	JCNC北海道の定例会に吉澤が参加しました。
6月 29日	“スライドトーク・イベント・フォトジャーナリスト山本宗補氏が語る3.11～福島第一原発事故の取材報告～”をATJと共催しました。
7月 2日	APLA理事会開催。
7月 10日	千葉県成田・三里塚ワンパックを吉澤と野川が訪問しました。
7月 11日～16日	日本ネグロス連帯25周年ハロハロツアー開催。 ※7月15日にはバコロド市にて記念セレモニーに参加

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 6.11 脱原発100万人アクション【賛同】
- 原子力発電に関する電力総連への申入れ【賛同】
- 福島原発事故緊急会議【参加・賛同】
- 福島の子どもたちを守るための緊急署名：避難疎開の促進と法定1mSvの遵守を【署名】
- ノーニュークスアジアフォーラム2011【賛同】
- 比バイオ燃料「土地収奪と軍事化のストップを！」【署名】

No Nukes Japan　ウェブサイト立ち上げ
STOP THE EXPORT OF NUCLEAR POWER PLANTS FROM JAPAN

日本からの原発輸出を阻止しようと集まった有志たちによる原発輸出・ウラン採掘の問題を中心とした英語での情報発信サイトです。海外の知人・友人などにぜひお知らせください。

http://nonukesjp.wordpress.com/

その他、複数の市民団体による福島原発事故関連の英語での情報発信はこちらでも確認できます。
Facebook：http://www.facebook.com/nonukejp
Twitter：　http://twitter.com/nonuke_jp

編集後記

被害者なのに、いつの間にか加害者にされている。そんな不条理がまかり通っている。東電が起こした事故によるセシウムで汚染されたワラを食べた牛、その牛を飼っている農家。被害者であるはずの彼らが被告席に。「なぜそんなワラを食べさせたのか」を責められている。福島県三春町で農業を営む会沢テルさんの「3月は種をまくとき。農民にとって土に触れない、種をまけない、雑草をとれないのは地獄です」という、今号で紹介した言葉と重なってくる。原発被災地で不条理に苦しむ人びとの言葉を、これからもお伝えしたい。（大野）

今号より新しいコラムが3本始まりました。原田さんが担当してくれる水俣からのコーナーは、震災後、水俣が経験してきたことと今を重ねて考えたいという編集委員の希望を受けて引き受けてくださったものです。共同代表秋山の『仙人の乱読・濫読』は、震災後、会議中に秋山が話していたのを聞いて、ぜひ書いてもらいたいと思いコーナーにしてしまいました！　今後どんな本が登場するのか楽しみです。その他、在日外国人の声にも耳を傾けたいと、『マイストーリー inジャパン』も設置。新コーナーもよろしくお願いします。（吉澤）

今号の『撮っておきアジア』は実は結構前に投稿いただいていたもの。ハリーナを読んでから投稿を考えてくださったそうで、読者の方からこういう形で反応いただけてうれしい限りです。そしてAPLA生活の料理。おいしいことは元より、非常に簡単かつやたらと味付けするわけではないシンプルさがなんだかちょっと料理上手に見せてくれます。言うなれば、これぞおすすめモテレシピなり。（松田）

ハリーナ HALINA

2011年　vol.02-no.13
2011年8月1日発行

［編集長］
大野和興

［編集者］
吉澤真満子、松田麻衣子

［表紙写真］
長倉徳生

［デザイン・制作］
十年舎

［編集・発行］
特定非営利活動法人APLA
（APLA／あぷら：Alternative Peoples Linkage in Asia）
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

［印刷］
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html